

歴史を生かしたまちづくり

横濱新聞

第16号

平成13(2001)年11月10日発行
 企画編集・発行：横浜市・横浜市歴史資産調査会
 事務局：財団法人はまぎん産業文化振興財団内
 〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1
 TEL.045-225-2171 FAX.045-225-2172



ベーリック・ホール

写真撮影：安川千秋



中丸家長屋門



昇龍橋

横浜市歴史的建造物にベーリック・ホールほか6件を認定——認定件数は55件に

横浜市では、昭和63年度に「歴史を生かしたまちづくり要綱」を定め、平成12年度までに49件の歴史的建造物を認定し、歴史的景観の保全を図っている。今回、新たに6件を認定し、認定件数は50を超え55件となった。

●ベーリック・ホール

横浜ゆかりの建築家J.H.モーガンの設計による昭和5(1930)年竣工の西洋館で、現存する山手外国人住宅の中でも最大規模をもつ。戦前期の横浜山手の外国人住宅を代表する建物である。スパニッシュスタイルを用い、アーチ型の窓や壁景など多彩な意匠が特徴的である。

●山手76番館

山手には数少ない意匠配の大屋根と六角形、八角形など様々な形の窓や市松模様の煙突など特異な細部意匠を有する昭和初期の貴重な西洋館である。ベーリック・ホールなどとともに山手の歴史的景観を構成する重要な建物である。

●中丸家長屋門

中丸家長屋門は、明治中期に建てられたもので、当時の長屋門の典型を示す貴重な建物である。阿久和川や周辺の緑と一体となった景観は、当時の田園風景を彷彿させ、地域のランドマークとしても欠く事のできない存在となっている。

●響橋

昭和16(1941)年竣工の響橋は、昭和15(1940)年に開催が予定されていた幻の東京オリンピックのマラソンの折り返し地点付近に架けられている。軽快なコンクリート・アーチ橋で「めがねばし」の通称でも地域に親しまれている。

●昇龍橋

建設当初の姿をとどめている横浜最古の石橋である。明治中期から大正4年までの間に建造されたと推定され、関東以北に残る明治以前の石橋としても貴重であり、いたち川や周辺の緑とともに、現在では稀少となった横浜の原風景的景観を形成している。

●山手隧道

戦前の道路用トンネルとしては最大の幅員をもつもので、震災復興事業の一環として昭和3(1928)年に竣工した。隣接する桜橋とともに石貼りで仕上げた坑門の意匠は、代官隧道などとも共通し、昭和初期を代表するものである。



山手76番館



響橋



山手隧道

スタンドグラスと近代建築

吉田綱市 横浜国立大学教授

建築の歴史は窓の拡大の歴史ともいえるほど、建築にとって窓の存在は大きい。近代建築は外壁すべてが窓の建築を目指したのであり、それを可能にしたのが板ガラス製造法の飛躍的な発達であった。建築とは関わらない宝石に近い貴重品としてのガラスは、古代エジプトからあり、ガラスを入れた窓も、古代ローマ時代ですでにあるという。しかし、それは一部の富裕層の邸宅のほんの一部に見られたに過ぎなかった。中世の教会堂のスタンドグラスは窓を大きく広げた。それは窓でもあり壁画でもあり、「光る壁」とも称され

て窓のもつ意味を変えた。しかし、このスタンドグラスの発達こそがそのま今日のガラスの発展につながったわけではない。大きな板ガラスが量産されるようになるのは19世紀のことであり、それまでは庶民の家の窓にガラスが入っていないことも多かったのである。

日本にガラス窓が入ってくるのも基本的には明治以降であり、それまでは風を遮りつつ採光ができるのは明かり障子だけであった。このガラス窓の導入は日本の住宅を大きく変えたが、それは主に機能的な側面においてであり、明かり障子がガラスに代わっただけと

もいえる。それに対して、スタンドグラスはそれまでにまったくなかったものであり、だから、洋風建築の一つのシンボルとなった。洋館にはスタンドグラスが掛けられるのが慣習となり、応接間だけを洋館にした全体は和風の家にも、その応接間にスタンドグラスがしっかりとめこまれたのである。洋室とスタンドグラスはワンセットになって洋風あるいは近代性のシンボルとなり、そうした近代性の獲得を可能にした豊かでの印となったのである。

そのスタンドグラスのしかも日本最初期とされる遺例が横浜英和学院礼拝堂に見られる。しかも、そこには華麗な垂れ飾りを備えた堂々としたトラスの化粧小屋組も残されている。小屋組は人間でいえば頭骸骨、そして窓は眼のようなものであるから、最も大事な部分が残されていることになり、この礼拝堂は建築としても貴重なのである。

横浜に残る歴史的なスタンドグラス

田辺千代 日本のスタンドグラス史研究家

●横浜英和学院礼拝堂……幾何学模様

所在地……南区磯田町124 (見学希望者は学校事務局[731-1901]へ)
建設年代……明治41(1908)年 中区山手町に竣工
大正5(1916)年 現在地に移築
昭和33(1958)年 移築・改修

横浜英和学院礼拝堂の大スタンドグラスは、横浜に現存する最古のものといえる。

山手の校舎を山手に解体移設することで、関東大震災の惨事から免れた希有な例である。礼拝堂の八面のスタンドグラスは英国の影響を受けたシンプルなデザインで、20世紀初頭アメリカであちこちに使われていた。

たくさんの方々の善意の献金によって製作されたスタンドグラスには、慎ましさと清々しさがある。何度も修復されながら竣工当時の面影を止めて現存していることに大きな拍手を送りたい。



写真提供: 横浜英和学院



スタンドグラス写真撮影: 平山健雄

■人物メモ
●ジョン・ラファージ(1835~1910): 画家、スタンドグラス作家としても有名。オパールセントグラスの発明者。同窓天心の良き理解者で日本美術に深い関心を寄せた。●ヘンリー・アダムス(1838~1918): 歴史家、政治家。ラファージの影響を受け、1886年7月3日ラファージと共に横浜に渡来。約3ヶ月間滞在。その間同窓天心、ピケロー、フェロニサの世話になった。
●同窓天心(1853~1913): 思想家、美術行政家。東京美術学校の創立に尽力、初代校長を務めた。門下に嶋田水樹、藤田鳴鶴、六角菊水、下山龍山などがいる。日本美術の復興を育てた。
●宇野澤辰雄(1867~1911): 東京高等学校在学中に内閣臨時建築局からベクション員兼美術学生としてドイツへ派遣された。ヨーロッパ(京)スタンドグラス技法を初めて日本に持ち帰った。専門は機織。●小川三知(1867~1928): 父親の跡を継ぐべく、医業を目指して、第一高等中学校に入学するが、画家への夢を捨てきれず創立間もない東京美術学校日本画家に入学。榎本邦邦、同窓天心の指導を受ける。後年単身でアメリカに渡りスタンドグラスの技法を学ぶ。ラファージの影響を受け、日本のスタンドグラスを芸術的に高めた。●森岡三(1902~1992): 小学校卒業と同時に宇野澤スタンドグラス製作所に入所。制作一筋に歩み、職人の神様といわれた。

●横浜市開港記念会館……ポー・ハタン号、箱根越え、呉越同舟

所在地……中区本町1-6 (見学可)
建設年代……大正6(1917)年 竣工

横浜市開港記念会館のスタンドグラスは、ほぼロマンティックな手によるものと言われ続けてきた。しかし、注意深く調べていくと新たな発見がある。

階段塔屋のポー・ハタン号(1858年6月船上で日米修好通商条約の調印が行われた)、貴賓室の箱根越え(1人はジョン・ラファージ、もう1人はヘンリー・アダムスと思われる。このことは、会館の一角にある岡倉天心の碑との関連が大きな意味をもつ)と呉越同舟。震災後に入れられたハマのマークに二対の鳳凰、じつと見ていると関わった多くの人の顔が見え隠れする。このスタンドグラスには日米の芸術、文化にまつわる沢山の物語が隠れている。



写真提供: 教育委員会事務局文化財課

●氷川丸一等特別船客室……藤、枇杷、椿等

所在地……中区山下町山下公園地先 (有料で見学可)
建設年代……昭和5(1930)年 竣工 (横浜三葉造船所)
その他……北米航路(シアル線)貨客船、11.622総トン

北米航路(シアル線)の貨客船として建造された「氷川丸」は、長い年月を乗り越えた戦前唯一の貴重な貨客船である。

一本マストに赤い二本線、黒い船体は横浜港内に繫留され多くの市民に愛されている。

左舷特別室には、明障子の棧を思わせる枠組みに斜め上から藤の花房、枇杷、椿等をあしらったスタンドグラスが納まっている。匠意も色も日本独特の静かな落ち着き感じられる良い作品である。

写真提供: 氷川丸リタワー株式会社

スタンドグラスの基礎知識と変遷

平山健雄 横浜マイスター 光スタンド工房

スタンドグラス、正確にはステインド・グラス、つまりステインされた、染め付けられた、転じて給付けが施されたガラス。ラテン語に近い仏語ではウイトライクと呼び、焼き付けられたガラス、独語ではグラスマーライデ、焼き給ガラスの意味になる。

この芸術の起源を研究した第一人者であるジャン・ラフォンによるとスタンドグラスとは、「色ガラスに給付けが施され、それが炉の中で焼き付けられ鉛の棧によって組み立てられたもの」と定義付けられている。その定義に沿ってみると時代は10世紀にまで遡り、今現在ドイツのダルムシュタットのヘッセン州立美術館にある「キリストの顔」と見られるガラス片が最も古い例ではないかとされている。

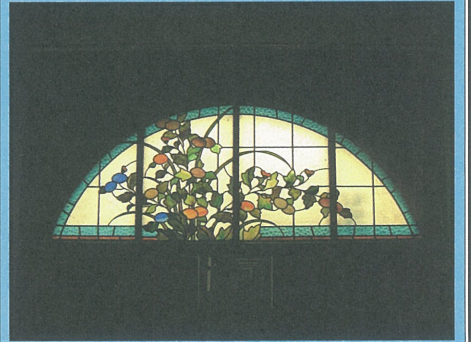
日本の鎌倉時代にあたる13世紀にフランスでは大聖堂の時代を迎えることになり、ロマネスク期の小規模礼拝堂を基盤とした建築様式から、窓が大きくとれるゴシック様式に発展してスタンドグラスが大聖堂の窓を華やかに飾り、爛熟期

●子安小学校……半円に秋草のスタンドグラス

所在地……神奈川区新子安1-24-1
建設年代……大正15(1926)年 竣工 (震災復興小学校)
昭和57(1982)年 建替

半円の中に野菊とススキ、実が清らかな作品である。竣工当時は表玄関の昇降口の上に嵌め込まれていたという。デザインは小川三知。草花をMass(かたまり)で表現する方法は、三知がアメリカから帰国後急速に広まった。

戦後、「スタンドグラス職人の神様」と言われた森勇三が修復を行ったが、前作の感じを損なわぬよう大変苦心した仕事だったと、生前筆者は聞いている。



●伊東医院……玄閣ホールに紅冠鳥のスタンドグラス

所在地……戸塚区矢部町(非公開)
建設年代……大正14(1925)年 竣工

旧東海道沿いに建つ伊東医院、四代続いているお医者さんである。

住まいの玄閣ホール左横に、さえずりが美しいことで知られる「紅冠鳥(コウカンチョウ)」をデザインしたスタンドグラスが入れられている。

天に傾いた太陽を透過させた時に最も美しく輝くように設計されている。陽があたるとどこかともなく小鳥の音が聞こえてくるようだ。事実、ガラスは光を透過するとき本当に諷うのである。



を迎えるに至った。中世からの伝統的なスタンドグラスの制作方法、原画に沿った色ガラスをカットし、そのガラスの表面にグリザイユと云う釉薬を描き、「調子づけ」と呼ばれる技法を使い影を付けたりガラスの透過率を調整したりして炉の中で焼成をし、鉛棧で組み繋ぎ、ジョイントでハンダ付けし、最後にガラスと鉛棧の隙間にバテを詰めて完成になる。

キリスト教美術であったスタンドグラスが一般の建物に使われるようになったのは英国で産業革命が興り工業生産によるガラスが大量に作られるようになってからで、日本には英国の新天地であるアメリカ経由でその素材であるガラスと技術が明治中期に遅れはせながら入ってくるようになった。

英国や米国からの工業生産による新しい型板ガラスや半透明のオパールセントガラスを使うことから始まった日本のスタンドグラスは、スタンドグラスの定義の一つである伝統的な給付けの技法が欠落していた訳だが給付けをしなくても美しく映える色ガラスの組み合わせが「洋」の素材を「和」の空間に巧みに取り込み、日本の洋風建築に特色ある「文明開化」の香りを演出してきた。

建築様式や住環境が激変した現代では「やすらぎの光」をどのように生活の場に醸し出すか、本質的なスタンドグラスの役割が製作者自身にも問われている。

※横浜マイスター：後継者の育成・確保、貴重な技能の継承及び技能職の社会的評価の向上を図ることを目的として、市民の生活・文化に寄与する優れた技能職者に横浜が授与している称号。